Philologie de la civilisation japonaise

Cours du 29 janvier 2013

Le *Gosen-shû* et le *Shûi-shû*

- 後選和歌集
- 拾遺和歌集
- 伊勢の御息所
- 大歌所御歌
- 慶賀
- 哀傷

- 1166

やまひしけるをからうじておこたれりと聞きて

死出の山辿る／＼もこえなゝで
　　憂き世の中に何歸りけむ

- 1389

三條右大臣

先帝おはしまさで世中を思ひなげきてつかはしける

儚くて世にふるよりは山科の
宮の草木とならましものを

- 1390

兼輔朝臣

かへし

山志なの宮の草木と君ならば
我れは雫にぬるばかりなり

- 源信（恵心僧都；924-1017）Genshin

- 476　おなしこと一味の雨のふりぬれは
　　草木も人も仏とそなる

- 1376

惟濟法師

年星（ねんさう）おこなふとて女檀越のもとよりずゞをかりて侍りければ加へてつかはしける

百年にやそとせそへていのりける玉の驗を君みざらめや

- 行基（菩薩）668-749

本地垂迹

神仏習合

両部神道

大僧正行基よみ給ひける

法華經を我がえしことは薪こり

菜つみ水汲み仕へてぞ得し

「即隨仙人，供給所須—採果、汲水、拾薪、設食，乃至以身而為床座」

- 1331

よみ人志らず

題志らず

世中に牛のくるまのなかりせば

思の家をいかでいでまし

- 1337

　齋院　　（詮子）

女院の御八講の捧物に金して亀のかたを作りてよみ侍りける

業盡す御水洗川の龜なれば

　　法の浮木にあはぬなりけり

「佛難得値，如優曇鉢羅華，又如一眼之龜，値浮木孔。」

- 1342

雅致女（まさむねむすめ）式部

性空上人のもとによみて遣はしける

暗きより暗き道にぞ入りぬべき

はるかに照せ山の端の月

- かへし

576　かくはかりくらきにまよふ身也とも

てらささらめや山のはの月

- 1344

空也上人

市門にかきつけて侍りける

一度も南無阿彌陀佛といふ人の
蓮の上にのぼらぬはなし

易行

- 576

榊葉にゆふしで掛てたが世にか
神のみ前に祝ひそめけむ

- 577

榊葉のかを香はしみとめくれば
八十氏人ぞ圓居せりける

- 578

御幣（みてぐら）にならまし物をすべ神の
　　みてにとられてなづさはましを

- 579

御幣はわがにはあらず天にます
　　豐岡姫のみやのみてぐら

- 580

逢坂をけさ越えくれば山人の
千年つけとてきれる杖なり

仙人

- 581

四方山のひとのたからとする弓を
神のみまへにけふ奉る

- 582

いその上ふるや男のたちもがな
くみのをしでゝ宮路通はむ

- 583

銀の目拔の太刀をさげはきて
ならの都をねるはたが子ぞ

- 587

住吉のきしもせざらむ物故に
妬くや人に松といはれむ

- ある人のいはく住吉の明神の託宣とぞ。

- 596

人麿

題志らず

ちはやぶる神のたもてる命をば
　　誰がためにか長くと思はん

- 620

藤原忠房

延喜廿年亭子院のかすがに御幸侍りけるにくにの官廿一首の歌よみて奉りけるに

珍しきけふの春日のやをとめを
　　神も嬉しと忍ばざらめや

- 591

重之

はこざきを見侍りて

幾世にかかたりつたへむ箱崎の
松の千年の一つならねば

- 595

平祐襷

粟田右大臣の家の障子に唐崎に秡 したる所に網ひくかたかけたる所

御禊するけふ唐崎におろす網は
神のうけひく驗なりけり

- 601

能宣

みかみの山

千早振みかみの山の榊葉はさかえぞまさる末の世までに

- 589

安法法師

住吉にまうでゝ

あまくだるあら人がみのあひおひを
思へば久し住吉の松

- 590

惠慶法師

我問はゞ神代のことも答へなな
昔をしれるすみよしの松

- 593

僧都實因

ひえのやしろにてよみはべりける

ねぎかくるひえの社のゆふ襷草のかき葉もことやめてきけ